



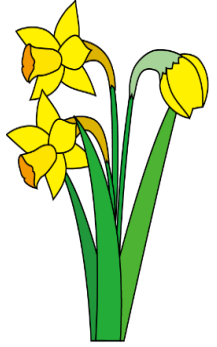
# カトリック八尾教会ニュース 2023年2月

Tháng hai

こんげつ よてい  
【今月の予定】

じかん  
ミサの時間

2日(木・祝) 主の奉献	10:00	
3日(金・記) 福者高山右近 殉教者	-----	
5日(日) 年間第5主日	9:00	①グループ(A+B地区+ベトナム①)
日本26 聖人殉教者	11:00	②グループ(C地区+ベトナム②+③)
	13:00	小教区評議会
11日(土) 世界病者の日	-----	
12日(日) 年間第6主日	9:00	②グループ(C地区+ベトナム②+③)
	11:00	①グループ(A+B地区+ベトナム①)
18日(土) 初聖体勉強会	14:00	
信仰講座	16:00	
19日(日) 年間第7主日	9:00	①グループ(A+B地区+ベトナム①)
	11:00	②グループ(C地区+ベトナム②+③)
ベトナム語ミサ	15:00	
22日(水) 灰の水曜日(四旬節)	19:30	『灰の式』 (大斎・小斎)
26日(日) 四旬節第1主日	9:00	②グループ(C地区+ベトナム②+③)
	11:00	①グループ(A+B地区+ベトナム①)



【平日のミサ】 木曜日 10:00 2日、9日、16日 \*23日はお休み。

\*「からし種」(テーマ)「四旬節」と「大斎と小斎」

復活祭は、キリストの復活を記念する、キリスト教の最も重要な祭日です。復活祭前の準備期間を「四旬節」と呼びます。古くから、復活祭に洗礼を受ける志願者の直前の準備期間と考えられてきました。また、すでに洗礼を受けた信者も、この期間をとうして節制と回心につとめ、自分の生活をふり返ります。四旬節は「40日の期間」という意味です。40という数は、イエスが荒野で40日間断食をしたことに由来し、それにならって40日の断食という習慣が生まれました。断食については現在では完全に食事を断つというよりも、十分な食事をひかえることと考えられていて、「大斎と小斎」を守る日は灰の水曜日と聖金曜日(復活祭直前の金曜日)、「小斎」を守る日は祭日を除く毎金曜日です。

・「大斎」・・・一日に一回だけの十分な食事とそのほかに朝ともう一回わずかな食事をとることができ、満18歳以上満60歳未満の信者が守ります。

・「小斎」・・・肉類を食べないことですが、各自の判断で償いの他の形式、とくに愛徳のわざ、信心業、節制のわざの実行をもって代えることができ、満14歳以上の信者が守ります。(大斎も小斎も、病気や妊娠などの理由がある人は免除されます。)(中央協議会H.Pより)

■古い枝を回収しています!

てんれいいんかい  
(典礼委員会)

玄関ホールに箱を設置しますので、2/19(日)までに古い枝をお持ちください。

## ～二十歳の祝福メッセージ～

### 『若者へ』

主任司祭 <sup>チェ</sup> 崔 <sup>ジョンヨン</sup> 周永神父

です、まず、を使わずに書かせて頂きたい。何故なら、その分もっと書けるのでご理解願いたい。自分は今も未熟だが、もっと暴れ者だった時、思っていた。こんな気にくわない世の中は誰が作った？と。今になっては、少なくとも自分が関わってきた分、責任を感じている。

最善を尽くして生きてきたと言い訳したいが、どうやら、どう考えてみても、過ちや罪の方が多、重い。これからの人生は償いのつもりで生きていくと捉えている。例えば、愛していることを言い訳に付き合っていた彼女達にたっぷり甘えていたし、極めて大事にしてくれた恩人に取り返しにつかない心の傷を与えてしまったこと、司祭の道を歩むことを言い訳に韓国の家族に10年も以上これといった連絡も真面に取らなかったこと、それに、ローマ留学後に韓国で4カ月間もいたのに実家に一切行かなかったこと等。こういった振る舞い以外、内心では、偏見や先入観の強い人間で人を裁いたり責めたりしている自分。

不思議なくらい、神経質だった子供の頃から変わってない自分に気づく。と同時に、その中で働く神様の偉大な御手を感じる。60キロ、57キロ、53キロ、50キロ。ここ35年間の体重の変化だ。中学2年生から33歳まで、つまり癌にかかるまでの体重が60、癌の治療が終わった時の体重が57、ローマ留学時の栄養失調で苦しんでいた時が53、最後50は今の体重。神様はその時期に相応した体を与えてくれていたと感じる。無茶ぶりばかりしていた若い頃には、それなりの体力があり試行錯誤を繰り返すことができた。ほとんど休まず、ずっと走りっぱなしだった。何に向かって？ もっと自分を愛してくれる人に！ 自分の価値がまだ分かっていなかった頃は、人からの評価や愛情が大事なわけだ。そして、病気の後、体力が半分になったと感じた。無理して生きてきた結果、心と体はボロボロだった。荒れ野を彷徨うオアシスを切に待ち望む時期で、何より司祭になれる道が断たれたことが耐え難かった。人間の成熟は苦しみから来るのだとよく分かった。

ローマ留学時は、違う意味で砂漠だった。出来上がった大人が、もう一度、幼児に帰ることを強いられることだ。つまり、言葉で、文化で、食べ物で、それに健康のことで自分は死んで、蘇った。栄養不足で唇は裂け、目は斜視に近く、夜は眠れない日が続いた。その中でも、神様の導きと恵みが惜しまず与えられていた。最後に50。今度の年始に思いっきり寝だめをしたつもりだが、寝ても寝ても疲れが取れない。宿題はずっとやって来る。なので、これを運命として受け止めている。

何で？と聞くことをとうの昔に辞めた。何故なら、それは意味ある哲学的な問いではなく、ただの不満の表れや愚痴に過ぎないのだ。疲れきっていて、イライラする時こそ、極めて神様に近い。時間を惜しんで働き、そして祈り、ようやく一生の務めが終わったら、永遠の故郷に帰る。自分の価値がようやく分かってからは、神様を人々に述べ伝えること、それ以外に意味あるものは何一つない。

若者へ。

貴方の人生を生き、貴方の価値を見出し、惜しみなく愛するように、自分を！ 人々を！ 神様を！

